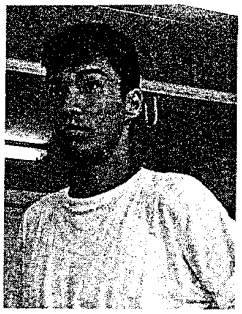


八戸工業大学第一
高等学校　平成２年卒業

氏　名　山田勝也

現住所　八戸市小中野
７丁目25－９

職　業　会社員
（三真工業）

思い出の言葉

「お前達じゃ県でも勝てない」という監督の言葉。

あの言葉を淡々と聞き流していたとしたら自分たちの実績というのは、高がしれていたかもしれない。でもあの言葉が本音であったのか、やる気をださせる為の言葉であったのかは分からないが、これは監督のかけであったのだろう。

あの頃にしてみればあんな事を言われてもおかしくないメンバーだった。取り分けセンスがある者もいなかったし、それでいて体型的な面でカバーできるかと言えば、皆小柄。唯一の長所としてあげるとすれば、皆負けず嫌いな所、その気持ちが団結力と言う形になりよい結果が得られた。

工大一高の練習体系とは、どんな相手にでも対応できるような内容であったと思われる。普通であれば自分自身のスタイルを作りそれを磨くといった練習だろうがうちの組手の場合は、個々にあった特性を生かしたノビノビ流である。したがっていろいろと研究もしなければならない為、練習量も多く内容の方も充実している。メンタル的な面では、練習に練習を重ねてきたんだから負けるはずがないという気持ちを自惚れではなく自信として、今まで達成できなかったこともやり遂げ、さらにそれ以上の成績も残せた。

今思えば、あの言葉がきっかけで、聞き流せばただの愚痴にすぎなかったかもしれない。人それぞれのとらえ方があるが自分達にとってあの言葉がよい結果に繋がり、自分にとってもなくてはならない思い出の言葉だった。

弘前高校　平成２年卒業

氏　名　赤羽　優

現住所　宮城県若林区
若林２－６－４

職　業　学　生

青春の舞台

弘前高校空手道部はまさに私の青春の舞台でした。青森県有数の進学校であるにもかかわらず、勉強もたいしてせずに、部活ばかりしていたため、高校生活を思い起こすと真っ先に頭に浮かぶのは空手部の事です。私にとっては、本当に高校生活イコール部活動であったため、部活を通して学んだ事も人一倍あるのではないかと思います。私は個人戦の選手にすら最初はなれなかったので自分が決して才能のある人間ではない事を認めていました。だから正月も3日間しか休まずにたった一人で道場で練習したり、朝練をしたりして、自分の才能の無さをおぎなおうと努力しました。そうしてある程度試合で成績をあげるにつれて「強くなれるかなれないか」という所で、「才能があるかないか」の問題など「努力できるかできないか」の問題に比べればささいな事であると気付きました。また、自主練をする時に辛かったのは、はっぱをかけ、後押ししてくれる存在が無かったという事です。厳しい監督のいる強豪高に入っている奴は実際強くなります。まあそれだけ厳しい練習を味わってはいるでしょうが、でももしその人が練習もほとんどしないような弱小高に入っていたらそれでも強くなっていただろうかと考えるとそれは難しいであろうと思います。

ですからそう考えると「朱に交われば」ではありませんが、その人の身のおかれる環境いかんで自然に弱くも強くもなり得るという部分があると思うし、それだけ環境というものは大事であろうと思います。そういった意味で、特に自主練の時だけではなく弘高空手部の部活は生徒だけでほとんどしていたので手を抜こうと思えば抜ける環境で精一杯練習するのは、厳しい監督に尻をたたかれながら精一杯練習するよりむしろ辛い事だろうと思います。このように練習の内容が生徒にゆだねられていたため、その年々で強かったり、弱かったりしたのですが、そうした生徒の自主性に任せていた所が弘高らしくもあり、良かったのではないでしょうか。そういった自主性に任された練習の中で強くなっていければ本当にすばらしい事であると思います。どうか今現在弘高空手部で頑張っている皆さんには甘い環境の中で自分を甘やかさずに頑張って欲しいと思います。

岩鶴

青森東高校平成２年卒業

氏　名　白鳥知見

現住所　東京都武蔵野市

職　業　法政大学工学部

高体連空手道部20周年おめでとうございます。自分もちょうど20歳となり共に成人したわけですが、小学一年から始めた空手は、自分の今までの人生の中で大きなウェイトを占めるものです。特に高校時代の3年間は、貴重で意義のある体験が出来、その中で得た自分なりの哲学というものは、今現在生きる上で、大きな原動力となっています。

高校の一番の思い出と言えばやはりインターハイ高知大会に型で出場したことです。インターハイでは、体調を崩して予選落ちした選抜大会の雪辱に燃えて、なんとしてでも決勝へという思いがありました。出場決定後道場で、大井先生に夜遅くまで指導いただいたり、型が片足で立つことが多い岩鶴ということで、試合用マット対策に、風呂用マットを買い集め、ガムテープでつないで一人でこれでもかこれでもかと練習したことなど、良い思い出として残っています。結局予選2位で通過するも、マット対策実らず岩鶴でぐらつき決勝進出なりませんでした。

大会に参加し充実した生活が送れたのも、偏に先生方が個人参加という特別な形に理解し協力して下さったからです。また、青東高の福井先生、田中実先生、いろいろ助言していただいた高山先生、そして空手でここまで育ててくれた大井先生には感謝してもしきれません。

自分は現在大学で空手をやっており、一生空手との縁は切れないと思います。このような素晴らしい経験をさせてもらった高体連空手部の発展を願ってやみません。

私を支えてくれたもの

弘前南高校平成２年卒業

氏　名　竹内裕己子

現住所　宮城県仙台市

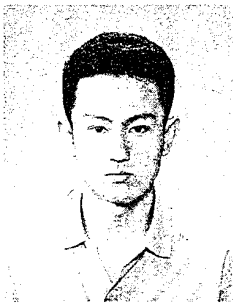
職　業　オリエンタル建設㈱

私が空手道と出会ったのは高校一年の時でした。高校時代はとにかく無我夢中で頑張っ

たような気がします。早く先輩達に追い付きたい、試合で勝ちたいという気持ちから、あせりながら練習した時期もありました。短い高校生活の中で好成績を残すことの難しさは誰もが経験してきたことと思います。もちろん私も、気力だけは誰にも負けないと思いながら頑張り続けました。私たちは、運よくインターハイにも出場することができましたが、今では出場した事実よりも、〝精一杯頑張った〟ということが、自分自身の力になっているような気がします。

今でも空手を続けていますが、何故続けているのかと聞かれると、正直なところ答えに困ります。友達が遊んでいる時に、辛い稽古にでている自分が馬鹿らしくなった時もありました。でも、熱心に教えてくれる先生方もいる、勝った時に喜んでくれる人達もいると思うと、頑張ろうという気になるのです。ある試合で優勝した時、〝頑張ってくれてありがとう〟と言ってくれた人がいました。その言葉は私にとって大変うれしいものでした。

何のスポーツでも同じかもしれませんが、続けることによって他の人には味わえない大切な何かが掴めると思うのです。それは、空手以外でも大きなプラスとなるでしょう。現在高校生の人達にも、空手を通して様々な事を学んでほしいと思います。私も学ぶことはまだまだ沢山ありますが、後輩達に恥じないように頑張り続けたいと思います。



三本木高校平成４年卒業

氏　名　大久保　　威

現住所　東京都世田谷区

職　業　駒沢大学生

自分の空手道観

初めに、青森県空手道部創立二十周年おめでとうございます。自分も、本県の道場で習い、本県の試合に出場していたので、誠に喜ばしく思います。さて、本題にうつりますが、自分が空手道をやってきて一番の誇りは何か？と聞かれたら速攻で「空手道をやめないで続けていること。」と答えるでしょう。自分は全国や海外で優勝したりしていますがやはり「やめないで続けていること。」の方を誇りにしています。このことは簡単なようで難しいと思います。自分は「三本木高等学校」という高校の空手道部に在籍していましたが、入学当時の部員数は自分を含めて、たったの2名。この2名で空手道部を支えてきました。部費や練習場のことで、他の部から責められる毎日が続きました。何度もやめようと思いましたが、お互い励まし合って、新入部員を入れることに努めました。今思うと1、2年の頃は練習よりも、そっちの方に力を入れていたように思います。何故、自分がそこまで努力したのかは、その時はわかりませんでした。しかし、卒業した今になって、やっとわかってきたようです。それが何であるか、皆さんには、わかりますか？

そうです。自分は「空手道が好きだ」ということに気付いたのです。あれほど苦しい立場にあっても、このことが自分をふるい立たせたのだと思っています。現在、空手道を習っている小、中、高の皆さん、やめたくなるような苦しい場面に合っても、頑張って乗り越えて下さい。卒業した時には、きっと何かをつかみとることが出来ると思いますよ。

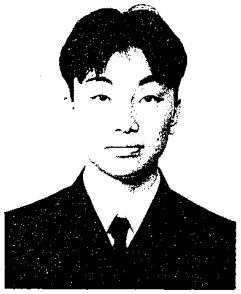
弘前東工業高校
平成４年卒業
氏　名　福田賢次
現住所　弘前市清野袋字川田六九一
職　業　弘前航空電子㈱

『私の空手道』

私は、高校に入学してから空手を始めました。最初は、空手はどんなスポーツなのかと興味を持ち友人と空手道部に入部しました。

そして、どんなスポーツでもまず体力づくりと基本が大切です。体力づくりでは、ランニング、腕立て伏せ、腹筋など色々な形での体力づくりが行われました。次に基本は、その場突き、前蹴りなど姿勢を崩さずに突きや蹴りを出す事が、どれほど難しいか思い知らされました。組手をする時にどれほど難しいか思い知らされました。組手をする時にどれほど大事かという事が特にわかりました。また、私は空手道を通して始めて学んだ事は、礼儀という事でした。私が読んだ空手道の本にはこういう事が書かれていました。『空手は礼に始まって礼に終わる』私はこの言葉に感銘を受けました。今私は、社会人として働いていますが社会に出てからも礼儀は大変に大事な事だと思います。空手道をやっていてこの事はよい勉強になりました。

話は変わりますが、私が空手道をやっていて嬉しかったことは組手の試合で勝った時の喜びでした。試合までの辛い練習に耐えて試合に勝った時の喜び、これはスポーツをしている人は誰でも分かるはずです。新人戦で個人組手で第四位に入賞したことがありますが、それからというもの空手道が楽しくて辞められませんでした。この事は私にとって高校時代の思い出として、ものすごく印象深いことでした。私は、空手道をやっていた中で、最終的に目標がありました。それは全空連の初段を取得することでした。型を初めて練習して、呼吸の整え方や姿勢の保ち方等体力的に辛かったですが、何度も何度も同じ練習を繰り返して頑張りました。結果的に初段を取得出来たわけですが、精神面で忍耐力に繋がったと思っています。これからは社会に出てもどんな事でも乗り越えられると思いました。結局私は、空手道を三年間続けましたが、色々な事を学び、自分の特技としても一生残ることだと思います。私は本当に空手道をやって良かったと今でもふと思う時があります。それはまた良き先生や友人に出会えた事でもあります。私は空手道を三年間空手を続けて色々な事を学び、本当に良い経験になりました。



六戸高校　平成四年卒業
氏　名　宮田重次
現住所　京都府舞鶴市字長浜無番地
職　業　海上保安官

空手道で学んだこと

自分は、六高空手道部に所属し、三年生の時には、団体戦三位、個人戦優勝してインターハイ出場と高校の部活動生活を有意義に過ごせたと思います。

始めは、先輩の勧誘がきっかけで体力に自信のない自分は体を鍛えるいい機会だと思い入部しました。練習は毎日基本動作の単調な繰り返しで、辛いことばかりで途中で何度も辞めようと思いました。しかしこの何度も繰り返した単調な基本動作こそ試合では重要な事であり高級な技も基本の延長線にあるということを知ったような気がします。それに部活動は団体生活の場であり、団体の中の一個

人としていろいろ人間関係についても学んだような気がします。

そして三年生の高校総体は自分にとって、高校空手道生活における最大のイベントを県予戦個人優勝という成績を残すことができて本当にうれしく思っています。県代表として、東北大会、インターハイ出場は、結果は振るわなかったものの、インターハイ開催地静岡での夏はよい思い出として、これからの自信につながっていくことでしょう。

この三年間の空手道生活で、練習での向上心、精神鍛練、人間関係とこれからの生きていく上で重要なことを学んだと思います。そしてこれらの事を社会生活で実践していきたいと思います。

特別寄稿

空手道の今後

品田　斉

『どのような趣味を人生の糧にして生きていくか？』これは人生を楽しみ、息をひきとる間際になって後悔しない為の重要なファクターであると私は考えている。

当然、個人の価値観、倫理観等によって異なってくるが、それは音楽鑑賞であったり、文学に打ち込むとか、スポーツで汗を流す事等、時にはギャンブルに生き甲斐を見出す事もあるであろう。しかし、基本的に『趣味』というものは、それに携わっているひと時は楽しいという前提があり、それは日常生活の対極に位置付けられた不可避な側面――仕事それに纏わるストレス等――から心身共に開放される為の手段とも言える。

ところが、趣味が「空手」となると多少性格が変わってくる。というのも武道一般に通じる事であるが、楽しみながら実践するという感覚は、この世界では無縁であり、むしろ精神と肉体を苦しめる事をモットーとする為趣味という表現は不適切かもしれない。

では、空手道を歩む人間にとって何がメリットかと問いただされれば、それは「充実感」としか返答しようがない。稽古を終え、道場訓を謳い上げた後の充実感…。

しかし、それも小、中学生、そして週三回道場へと足を運ぶ社会人のみが体験出来る、「アフター5」の醍醐味と言えよう。いわゆる高校、大学レヴェルの体育会系空手道部に於ける稽古の質、量は、一般道場のそれとは比較の対象ではなく、場合によっては、その人の人生に於ける恐怖と憂鬱の瞬間でさえある。

しかし、いかなる経路を辿ろうとも、空手道の実践を通じて掲げる鉄則は、精神の充実人格完成に関与する掟を貫く事、すなわち精神修業である筈だった…。

～Amateurism～「アマチュア精神」という言葉の解釈は人により異なるかもしれない。しかし、競技そのもので収支を合わせる事はないが故、苦しい日々の稽古や、華やかな大会以外には現実の生活がある。「学生の本分」とはやはり勉強であり、これを抜きにしては、マスメディアを賑わす活躍も色褪せ

てしまうというものだ。

文武両道を貫くというのは口で言う程た易い事ではない。頑強な精神力がなければ、決して実現する事はないのである。

前述したように、空手道の本質は精神修業にあり、実践する事よりむしろ、それによって得た個人的な倫理観、いわば悟りの様なものが、空手道を通じて得る最大のメリットであると私は信じている。しかし、本人以外にはなかなかこの論理は通じそうもない。それはまさに、オリンピック選手に押しつける国民の無責任な期待に酷似している。若き日に築いた空手道精神という個人の財産が、いかにその人の空手以外の人生に作用し、心の健康を育くんでいるかを他人は知るよしもないのに…。

レギュラーとして試合に出場する事はなく、選手の応援に精を出していた人達が、卒業後社会的に重要なポストを占めている事実も少なくはない。全く逆のケースとして、学生時代、華々しい活躍を繰り広げながらも卒業後にバーンアウト、といった人達も実際にいる。

もちろん社会的地位が人生の全てではないし、それを獲得する事が空手道の目標でもない。だが現実に過去をふり返る人は多いし、複雑な表情で、過去に於ける別な可能性を示唆したりする人もいる。

しかし、それは空手道にかけるひたむきさの弊害に対する、自分と周囲の認識不足以外の何物でもないのである。とは言っても、そのような危険な未来像を、スポットライトを浴びて第一線で活躍している選手達が正確に予測する事は非常に難しい。空手道精神とはまるで無関係な数多くの誘惑はいたる所に存在しており、文武両道の厳しさとその意義の深さを、然るべき立場の人達が学生達に教えていかなければ、空手界は、伝承されてゆくべき純粋な魂を失ってしまう。

道場訓は装飾品ではない。蹴られ殴られ、血を流し時には涙し、その格闘技としての本質から崇高な理念を引き出し、空手人を導くオブザーヴァーなのである。

しかし、それを順守していれば空手界は紳士淑女のユートピアであり、そうもいかないのがこの世界なのだから…。

他のスポーツ同様、『日本のお家芸』としての牙城が揺らぎつつあるこの状況の中で、その技術論、指導方法論は年々進化の道を辿り、と同時に、スポーツとしての「カラテ」が隆盛を極めようとしている。

しかし、技術は常に進歩するとは限らない。時には素晴らしいアイディアやテクニックを過去に置き去りにしていく事もある。得るものがあれば、失う何かがあるように…。失って初めてその尊さに気付くものがこの世には数多く存在する。

武道として「空手道」が変貌を遂げてゆく現在、今後の空手界に、今まさに失われつつあるものが、新たな価値観と共に再構築される日は来るのだろうか——。

（光星学院・駒沢大・卒）